

タイピックだより

特別号



2017.10.15 発行



八月二十四日から二十六日の二泊三日、萩・石見空港利用促進の一環として、東北地方への社内研修旅行を実施しました。

福島県いわき市の川崎葉子様、株式会社ヤマサコウシヨウ佐々木社長、株式会社佐藤鉄工所佐藤社長を始め多くの方々のお話や当時の写真を見ました。

今回、タイピックだより特別号として先日の特号に掲載出来なかった社員のご感想を掲載いたしました。

研修旅行の感想

印刷事業部

寺井 政徳

今回の社員研修旅行は二泊三日の南三陸の被災地見学ツアーとなりました。初日は単なる社員旅行の雰囲気でしたが、福島県浪江町に入り被災地に来たことを実感しました。

福島原発に向かう海側の道には全てバリケードが張り巡らされ道を挟んで海側は全く生活感のない「ゴーストタウン」、山側は復興真っ最中という感じがし、被災してから六年半、未だ先の見えないという感じでした。

石巻市の株式会社ヤマサコウシヨウ様にバスが到着すると満面の笑顔で佐々木社長が出迎えてくださり、事務所二階の会議室にて当時二コース等で何度も見たあの被災状況の映像を見てから佐々木社長のお話を伺いました。被災当日は津波警報が出てから社内には社員と魚市場にいた社員を全員自宅に帰し、会社で後片付けをされていた時に津波に遭われ事務所の二階で海水が引くまで過ごされたそうです。その時に津波に流されて行く先輩の姿を見て何もできない自分の無力さを感じ、夜は真っ暗闇の中対岸の火災の火だけが残り、プロパンガスが漏れて流されていく「シュー」という音が何とも言えず恐ろしかったということでした。水が引いて事務所を出るとまさに戦後の焼け野原といった状況で、社員さんも数名命を落とされ会社も魚市場も完全崩壊した中で今、自分達に出来ることから始めようと手作業で魚をさばき、ほんのわずかではあるけれど従業員さん達と仕事を始められたというお話でした。仕事をしている時にだけ辛いことを忘れられたと言われ

るのを聞き胸が締め付けられました。被災されてもみなさん本当にやさしい笑顔で仲間の絆というものがはたから見えて取れました。自分も微力ではあるけれど何か力になればと思われました。

その後、大川小学校跡地に行き愕然としました。以前はあったであろう民家も全くなく、あるのは小学校の変わり果てた姿だけでした。ここで改めて自然の力は人間の力なんかではとうてい太刀打ち出来るものではないのだと思いました。そして今自分は本当に生かされているのだと強く思いました。だからこそ、毎日を精一杯生き抜いて誰かのために役に立つ人間でなければならぬし、自分の家族、つながりのあるすべての人をもっと大事にしなければいけないと思いました。この旅行に行つて改めて自分を見つめ直すきっかけがない貴重な経験をさせて頂き感謝いたします。



必要とされる人へ、必要とされる会社へ

Typic 株式会社 タイピック



〒698-0023 島根県益田市常盤町7番3号
Tel. (0856) 23-2800 代 Fax. (0856) 22-5592 番
<http://www.typic.jp>

震災の後はテレビで見えていたけど、六年経って実際に行くのと胸が締め付けられる思いがありました。二日目の午前中車内から見た福島原発の影響による立入禁止区域の所は、建物はそのままなのに人もいないし、電気もついていない異様な感じで死んだ街だった。その後石巻市に移動し、ヤマサコウシヨウの社長さんから当時の様子を聞き、亡くなった従業員の事や、目の前に知人が流れて行くのを見ても何もできなかったと言う無念の言葉が印象的でした。それから石巻魚市場での放射能検査の話聞き、あらためて風評被害について考えさせられました。午後は石巻市へ移動し、たくさん生徒が亡くなった大川小学校へ行きました。流れて来たがれきなどは撤去されていたが、校舎はそのまま残っていて当時の悲惨さを感じる事ができました。慰霊碑に名前と年齢が書いてあって、家族の関係性がわかる分辛かった。夕方には志津川小学校の裏山から震災前と直後の写真を見ながら復興中の街を見た。当然の事だけど、全然街は変わって前の面影もなくなっている。人も家も、そして思い出も流されて、たぶんまったく変わってしまった街に慣れると、昔の街の記憶は淋しいけど消えてしまっただろう。今回の旅行で通った海や川の近くはまだまだ道路整備中のところもあり、まだ復興していないと感じました。新しい家や町並みを見た時、勝手に被災者の気持ちになり悲しい気持ちになりました。

あの震災からずっと行って見たかった東北。興味本位とかではなく、あの日は仕事で東京へ行き、羽田空港でモノレールに乗ってすべにあの地震に遭遇しました。空港内

の天井からぶら下がった大きな看板は大きく揺れ、人も何かに捕まらないと立ってられない状態でした。その夜は空港内で眠れなかったのを覚えています。次の朝ようやく都内に移動ができホテルで初めて地震の状況を知ることができました。そんな事もあって何か運命的な気持ちで、当時何か力になりたいと募金や支援購入したりして、被災地にも行って見たかった。六年経つと気持ちは薄らぎ、この機会がないと行く事もないと旅行に参加しました。実際行くとまた数年後、機会を作って一層復興した所が見たいと思いました。地震や津波など自然現象だけでなく、突然何が起きるか分からないこんな世の中なので、東北の皆さんに負けないよう、そして悔いが残らないように日々頑張り生きようと思いました。

印刷事業部

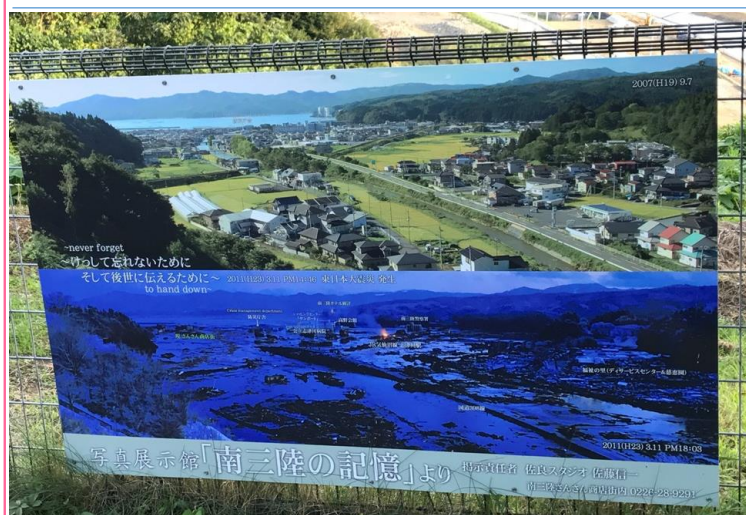
三浦 恵美子

旅行に行く前はテレビや新聞などでしか情報を見ていなかった被災地でしたが、実際に現地に行ってみていろんな思いが込み上げてきました。

一日目はほぼ移動で終わってしまいました。たが、福島県の旅館で一緒に過ごさせていただきました。川崎葉子さんからメテアでは知られていない被災地の方の現状など色々なお話を聞くことができました。特に印象に残ったことは、国道を挟んで片方は補助金があるけれど片方はおられないということ、今まで仲良くしていた人たちが国の単純な決定で互いに憎み合ったりけんかになるというお話です。川崎葉子さん自身も大変な苦労をされているにもかかわらず、とても気丈に振る舞っておられる姿が印象的でした。

一日目は福島県から宮城県に向かいました。まず、福島原発近くの立ち入り禁止場所をバスで通過しました。前日に川崎葉子さんがお話をされていた国道も通りました。その後、石巻市にあるヤマサコウシヨウ様に行き、社長から震災があった時の話をお伺いしました。実際に経験されたことを思い出して話すのは辛いだろうと思いますが、社長はいつも笑顔で話をすることが自分の役割だと言われていました。その後、大川小学校に向いました。小学校に看くとまだ震災直後と思われるような光景が目の前に現われ言葉を失いました。震災前の写真も掲示されており、改めて震災のすごさを感じ知らされました。私自身、小学生の子どもが2人いますので、その時のことを想像するだけで胸が苦しくなりました。そのあと訪問した南三陸町ではかなり復興も進んでいましたが、まだまだ課題はたくさん残されているというお話を佐藤鉄工所の佐藤社長からお伺いしました。実際見てみても整備されているところはほんの一部で、完全に復旧するまでどれくらいの年月が必要なのだろうかとと思うとまた胸が苦しくなりました。

今回の旅行で震災後八年経ってから初めて行かせて頂きましたが、色々な思いが行くところまで込み上げてきて、私には少し苦しい旅行だったように思います。でも、行かなければ知ることができなかったこともあったと思いますし、行くことで被災された方への思いも少し変わったような気がします。今回行かせてもらったことで、被災された方たちだけの問題と思わず、自分ができることを何か探してお手伝いできれば少しでも早く復興することができるとのかなと思いました。



印刷事業部

竹中 智広

一日目は最初に思ったことは、団体行動時には常に素早く行動し、時間のロスを縮めて目的地に行くことはものすごく神経を使うものだと感じました。二日目はいわき蟹洗温泉 太平洋健康センターでのことです。川崎葉子さんと夕食を皆で一緒にすることになりました。川崎さんは震災に遭われてもそれに挫折しつかり前を向いて行動できる人です。すごいなと思いました。苦しい時でもそればかりに囚われてはいけないということを感じました。

一日目は、震災時の映像や実際に起きた被災地を見学に行き、その時の悲惨さを改めて痛感しました。株式会社ヤマサコウシヨウ様では、当時の映像を見て、社長さんから話を聞いた。そして、もしそのような状況になった時を想定した準備等をして行うと思います。

そして、大川小学校を見学に行き、津波に流されて学校の全体が変形してしまっているのを見て津波の脅威を実感する思いでした。「ソクリート」をいともたやすく破壊し変形させてしまつたのはただただ恐怖しかないと思います。多くの生徒さんが犠牲になり、これからの未来が奪われてしまったことは、悲しくてしょうがありませんでした。

その後、皆さん商店街に行き、写真店に入りました。そこでは災害時の写真や避難した人の様子の写真、復興していく写真などの多くの写真を拝見しました。その時その時の様子を鮮明に映し出されており、直に写し手の思いが伝わってきました。このように写真館があるおかげで当時のことを知ることが出来るのはとてもいいことだと思いました。

震災の脅威を実際に見たり聞いたりして

とても恐ろしいと実感すると同時に困難に直面した人がそればかりに囚われず、前に進む強さを合わせ持っていることも実感しましたが、実際に見るとすごさが違います。

今回の旅行を通じて、震災の恐ろしさを見学して知り、もし起きてしまった時、その時どう対応したり判断するかを考えることで、いざという時に対応していけるのだと実感しました。

印刷事業部

三浦 裕子

八月二四日～二六日、二泊三日の社員研修旅行。初めて行く地というワクワク感とドキドキ感、そしてあの震災のあった地でもある、悲しい、重苦しい気持ちもありながらの出発でした。

一日目は、福島県入りでしたが着いた頃はもうすでに暗く、その夜は川崎葉子さんを交えての宴会で、とても楽しいひと時を過ごすことができました。

一日目は、福島県双葉 浪江町を車窓から眺めながらの移動で、あの震災の爪跡が今もなお残されている現実を目の当たりにし、あの時の記憶が思い出され何とも言えない気持ちで閑散とした風景を見ていました。そして株式会社ヤマサコウシヨウ様の視察となり、震災の映像や社長様の体談などを聞き、復興も僅かながらでも前進しているという事に少し安心しました。社長様のとても温かいお人柄がとても印象的でした。

大川小学校跡地では、以前の町の風景写真とあまりに変わってしまった町に言葉を失いました。現実が想像以上のもので、何故、どうしてこんな事が起きてしまったのかと……たまらない気持ちで一杯になりました。現に震災に遭った人達にとっては、私達が想像して

も到底比較にならない悲しみ苦しみだったと……二度とこんな事が起きないでほしいと願わずにはいられませんでした。

次の日は世界遺産中尊寺金色堂へと向かい、午前中の少しひんやりとした空気感の中、ガラス張りとなっている仏堂を拝観し、周りの自然も豊かで気持ちよく散策を楽しむことができました。

この研修旅行で感じた事は、普段この益田にいる私は東日本大震災の事は知っていても、ただの側面では知らないのだと痛感しました。各所の被災地を目にした時に、どんなに恐ろしかったのか、苦しかったのか、悲しかったのか、切なかつたのか、大変だつたのかと、遭遇してみないと絶対にわからない事だと思っています。確実に六年前より前に進んでいる事をこの目で確認できて良かったです。頑張れのエネルギーを心の中で叫んでいます。また機会があれば足を運びたいと思っています。



個人的に、震災地を訪れる事は、まず無いであらうと思いつく。参加させて頂くことにした。福島の原発事故により家を離れなければならなかった状況、一部地域によっては、帰る事が出来たりはしているものの、りっぱな家々が雑草の生い茂る中、主を待ちわびるかのこくたすんでいる。人も家も淋しく切ない、人が住まなく荒れ果てるとは、こういうものなのか胸が痛む。又、道一本を隔てて暗が分かれる今後の生活状況、なんとも言えません。やりきれませんね。

石巻市では、これまた町ごとというに無いのである。株式会社ヤマサコウシヨウ様の社長から、当時の状況をスクリーンを交えながら説明を受けた。涙が溢れます。社員さんも数名亡くされたそうです。社用の車が七十台有り、その車中で亡くなられた方は居なかった事が何よりの救いだ。たとえ話されました。仕事を再開するにあたり二ヶ月位で少しずつ仕事を始め、現在の状況になる迄一年かかったと語られた。今有る事務所社屋は新しく建てられ、残った工場入口には、津波が来た水位を表す目盛りが高い位置に印されていた。深い悲しみや苦しみを抱え、今在る姿とお話を聞かせて頂いた社長に感謝を申し上げます。復興の歩みの中で何事も一歩、一歩からですと言われた言葉が印象的でした。亡くなられた方々の御冥福を祈ると共に、つらい状況にあっても、残された者が精いっぱい生きぬく使命があるのだと思いました。町の状況は復興とはまだまだ遠い様で、盛土であったりと、重機があちこちで動いていました。先に述べた、一歩一歩ですね。生まれ変わる新しい町に期待します。

そして、大川小学校。津波はすごい破壊力です。当時りっぱなお洒落な校舎がなんとも無惨な姿でそこに有った。今でも線香や花が供えられており胸が痛みました。直ぐ側には山もあり、子供でもなんなく上がれる山ではないか、大人の判断にゆだねられる子供達の身痛ましい限りである。この地に立ち今でも子供達の声が聞こえるようであった。…台掌

今回、研修旅行を通して楽しいのではなく、重いものがあった。福島原発や津波等で家を失い、家族を失い、生きる力を失ったのかに悲しい出来事の中を走りぬけた。残された者が、町、地域を再生し未来につなげていく、使命や役割が有り、その中で出来る事をしていく。私は今有る普通の生活、あたり前と思っている生活がどれだけ幸であるかを感じます。



ゆづりやさいいパントリー教室 清水 壮一

震災から6年が経過し、今どうなっているのか気になっていたところに、今回の社員旅行が東北の震災の現場を巡る旅と知らされ、ぜひ行ってみたいと思いました。

福島県南端のいわき市から国道6号線をバスで北上し、石巻方面に向かい、途中、福島第一原発のある大熊町・双葉町を通過した際の町の様子が愕然としました。人が住まずに6年間経過した町はそのまま廃墟となり、放射能の影響の恐ろしさを実感し、これほどの被害をもたらす原発政策のリスクの大きさを目の当たりにしました。

松島海岸に向かう途中、車中からブルーインパルスの曲芸飛行の練習が目に入りました。二日後に、震災から七年ぶりに航空祭が開催されるこのこと。こんな形で復興の息吹きに触れることができ、気持ち明るくなりました。

石巻市内に入り、最初の訪問地 棚ヤマサ「フシヨウ」で社長（自身から当時の報道映像を交えながら震災当日のお話をお聞きました。亡くなった従業員の方々へのお気持ち、その後の復興へ向けて従業員の方々とまずできることから始めようと、魚の切り身の製造販売から少しずつ立て直していった経緯などを語られました。

そのまま社長の案内で、復興した石巻魚市場を見学。東北大学と共同開発した、数秒で魚の放射能チェックができる装置は、石巻の魚の安全性を内外に知らせるための取り組みですが、魚市場の方の言葉と意気込みから、石巻の人々の復興への気持ちの力強さを感じることができ、逆に元気をもらっていることができたことも素晴らしい体験でした。

次に訪問した南三陸町でも、町の人々の生きようとする力が感じられ、明日へ向かう力強さを感じました。後日ニュースで役場の新庁舎が完成したと聞き、着実に歩んでいることがうれしかったです。

旅の全体として、津波の直接被害を受けた町は着実に復興の歩みを進めていきましたが、それと比べて放射能汚染を受けた地域の復興の遅さがやはり印象的でした。原発以外のエネルギー技術の開発を強く願いました。そして、震災に負けずに未来に向かって挑み続ける地域の人々の力強さがもう一つの大きな印象です。

私自身もこの体験で得られた気持ちを軸に、また頑張ろうと思っています。



ゆづりやさいいパントリー教室 西田 寿喜

東日本災害、そして津波被害。その日、私はいつも通り秋のパントリー教室で働いていた。

午前の受講が終わわり、三時からの受講生徒さんが来られる頃から、津波被害を知った。来られる生徒さんの口々に、皿台空港が津波で被害に遭っている。甚大な被害だ。「と聞かされ、すぐにインターネットで検索を掛けると、ネット上には地震情報、津波情報、そして津波が襲い掛かる動画が掲載されていた。教室内では、被災地の動画を生徒さんと一緒に観ることになった。誰も言葉にならなかった。受け入れることができない現実が動画で放映されている。米国の9・11テロの映像が思い出されたが、今回ではテロではなく自然災害。しかも日本での被害。映像からは、かなりの死亡者が予測され、いたたまれない思いだった。

私自身、東日本震災とは比べることはできないが、学生を終えて三隅町に帰省した昭和五十八年七月水害を経験している。自然災害の前には人間の力は無力で抗うことはできない。身の安全を確保し、時が過ぎるのを待つしかなかった。そしてその水害の復興作業は体力的にも厳しく、それ以上に辛かったのは知り合いの方の不幸を知らされた時だった。肉親の方達の気持ちを考えることもできず、ただただ目の前にある復興作業に没頭し、様々な感情を抑え込んでいた日々の思いが蘇ってくるように思い出された。

旅行日程の二日目が被災地への視察研修。株式会社ヤマサ「フシヨウ」さんでお話を伺った。津波災害当日の事、津波にのみまられ流されていく人々を見ているしかなかったことなど映像とお話を伺い、現地の方の思いに触れることができた。被災後の復興に向けての作

業は工場内に流されてきた数十台の車の整理。一台一台の車内を死亡者が残されていないかの点検から始まったという。幸いにも死亡者はなく、車だけが流されていたようで聞き手である私自身がほっとした思いだった。

被災地の視察はその災害の爪痕が気持ちを暗くさせるが、なによりであったのは、希望をもつ復興を目指し働く地元の方達の姿だった。被災地を応援する意味での観光客も増えているのだろうか。その働く方々の姿には、復興という言葉より「発展」という言葉が適していると思った。

お土産に買った「笹かまぼこ」は好評だった。少し炙って食べるとお酒の肴に最適だ。全国で販売される「笹かまぼこ」は、このスーパーでも見ることが出来る。これから「笹かまぼこ」を見る度に今回の研修を思い出すだろう。でも、今までの「笹かまぼこ」の味よりは少し涙の味でしょ、よく感じるかもしれない。



経理部

戎野 美津代

この度、東日本大震災の被災地を見学する
という事で参加し、初めて東北へ行きました。
地震とそれに伴う津波の震災後を生で見て
きれいになっているところもあり、まだまだ
復興途中というところもありました。その中
でも一番印象に残ったのが、大川小学校の現場
へ行き、現在と過去の違いを、目の当たりにし
た時は、涙が溢れ出てきて言葉になりません
でした。すべ裏には山があり小道があつて、子
供たちはその山にシイタケを栽培していたそ
うです。今更ながらですが何で山の方へ行か
なかつたのかと悔やまれます。今も思い出す
と、胸がいっぱいになってしまいます。大川小
学校を後にしてバスに乗りましたが何ともい
えない空気でただただ外を見て次の言葉が見
つかるのに時間を要した事を憶えています。

震災に遭われた方たちは、一所懸命に前を
向いて明るく生きている姿をたくましく感
じましたし、忘れないである。この震災の事
を思うと、やりきれない思いでいっぱいにな
りました。

今の私たちに出来ることは何だろうと考
えさせられます。

私たちが、今いかに普通に暮らしている
のがどんなに幸せなことなのだろうと思ひ
ました。毎日が同じ繰り返して、何の変化も
なく一日を過ごしていますが、みんなが健康
でいて毎日朝になれば「おはよう」と声を出
して家族に挨拶をし、出掛け、学校、仕事が終
われば家に帰る。単調ですがその中に幸せが
あるのかと思います。

記録、記憶としてわすれてはならないも
の、そしてまた後の世代へと伝えて行かなけ
ればならない事、時間とともに当時の恐怖感

は和らいでいつにありますが、それ自体はいい
ことだと思いますが、「和らぐ」と「忘れる」に
は大きな違いがあることを胸に秘めておい
ていくべきだと思います。

今、世の中何が起るか分かりません。その
時にどんな対応が出来るのか、普段から準備
をしていかなければならないと思いました。

最後になりましたが、この、東北の三日間
で実際に見て、聞いて感じたことは忘れず
に、今、当たり前前の事が当たり前前に生活出来
ていることに感謝していいと思います。

経理部

大庭 幸絵

石巻魚市場の皆さまは、放射能検査をして
本当に安全な海産物を出荷しています。

原発事故の後、放射能測定装置を導入さ
れており、安全な魚介類かどうかを確認して
出荷しているそうです。そのお話を伺い、これ
からお店を見かけても、安心して購入でき
ると思いました。

一日目には、株式会社ヤマサコウシヨウ
佐々木社長から震災のお話を伺いました。会
社の外壁に、当時の津波の高さ「二七五」の表示
があり、その高さに恐ろしく思いました。

佐々木社長は大地震が起こった後、津波の警
報が鳴ったので、一度は避難されたそうです
が、警報から三十分経つても何も起こらな
かったので会社に戻って地震の片付けをして
いたところ、津波が来たので「階へ避難して不
安な一夜を過ごされたこと」でした。私も
三十分間何もなければ、安全と判断してし
まうだろうと思いました。三十分は長いよう
に思っても、安全と判断するには早すぎる時間
なのだと知りました。動画の中で津波は約四
分の内に、恐ろしい早さで高くなり、街を進ん

でいました。見えてからいざ逃げようと思つて
も、逃げられるものではないと思いました。
被災後、会社が通常営業になるまで約一年かか
ったそうですが、通常営業は出来なくても、
日々、出来る仕事に精を出し、出来ることをす
ることが復興に繋がったとの経験談はとても
貴重で、他では聞けないお話でした。もしもの
時でも、ただ嘆くのではなく、小さな事でも出
来る事を見つけていきたいと思います。

同日、株式会社佐藤鉄工所の佐藤社長のご案
内で行きました高い所にある学校には多くの
人々が避難して、街を見ていたそうです。向か
いにある志津川高校はギリギリ津波が来なか
ったというお話でした。どちらかかなり高い
場所にあるように見えました。私たちが普段
こなら安全と思っている場所も、その時でな
いと安全かは分からないと思いました。直面
した時には、安全を信じ過ぎず考え続け行動
することが求められるのだと思いました。

その夜にホテル観洋で食べた海産物はどれ
も美味しかったです。海は恐ろしいこともあ
りますが、幸せをもたらしてくれる宝物でも
あると思えました。

東北は三日間では回り切れないほどの魅力
のある地域で、行けて良かったです。



〇事業部システム課

村上 貴志

福島、宮城の東日本大震災の被災地に行き、言葉には現すことのできない、貴重な体験をすることができました。二〇一一年三月十一日、二日目に三陸沖で衝撃的で見える間に町全体が津波によって流されていく映像はほんとに今起きているのかという感じでした。6年たつての場所はもうなっているのだろうかという想いで行きました。

一日目は、いわき市で、六年前の震災を感じさせない雰囲気、川崎葉子さんも被災をされているのに、常に前向きで、六年前の震災の事を忘れないために、色々行動しているのだと感じました。

二日目は石巻、女川、南三陸町へ移動で、近くにつれて徐々に復興がまだ手付かずのところもあると見て、それだけ事の凄さを感じ、復興に携わっている人の苦労も感じました。その様な状況を見ても何もできていないことに、情けなくなりました。石巻では、佐々木社長のお話を聞き、従業員のために、行動し、復興に努力をされて来て、二年で加工場を立て直されたのは、町を想う気持ちや従業員の事を想って来られたのだと感じました。従業員の方も震災があったことを感じさせないくらい明るく、前を向いて頑張っておられるのだと感じました。女川ではまだ復興が進んでいないと感じました。地元の特産品を提供しながら、復興を目指して頑張っている姿は、心に響くものがありました。その後には大川小学校に行き、学校の建物を見させていただきましたが、ほんとに言葉が出てこなかったです。少しの判断の違いで助かったかもしれない状況で、なかなか判断が出来なかったのだらうと感じました。もしその立場になつ

ていたら、判断が出来なかったと思います。また、南三陸町でも復興がまだ進んでいないような感じがあり、その時に津波から避難した人たちはどの様な気持ちでその場に立ち、何を考えていたのだらうかと思いました。何とも考え深いものがありました。

三日目は中尊寺金色堂に行き、今までに世界遺産は見ただことなかつたので、貴重な体験をすることができました。三日間を通して当時の状況から六年たつた現在の状況が見ることができて、心に残る旅行となりました。東日本大震災をはじめ、現在では様々なところで災害が起きています。起きた時にどうするかを常に考えておかないといけないと思います。また、東日本大震災を風化させないためにも、一人一人が心に想い、日々行動していかないと感じました。



〇事業部システム課

山崎 鈴枝

六年前の三月十一日、東日本大震災の映像は、何度となくテレビやインターネットで見ましたが、あの恐ろしい自然の脅威は、多くの人々を傷つけ、言葉にできないほど深い悲しみでいっぱいでした。

震災から六年。まだまだ復興途中であることや、メディアからでは分からない苦悩や悲しみの中から踏み出された勇気や未来に向けての気持ちを聞かせていただきたい、今回の旅の中で、今の自分に出来ることは何か、これから何をすべきかを深く考える旅でした。

宮城県石巻市では、株式会社ヤマサヨウシヨウさんの佐々木社長から貴重なお話を聞きました。佐々木社長が語られた言葉から、大きな自然の前には人間はあまりにも無力だということを感じましたが、逆に、自分たちの出来ることから始められたという

一つ一つが、株式会社ヤマサヨウシヨウさんの企業理念にもある「自然・地域との調和を大切に、健康で豊かな食文化を創造する企業」とされているように、食品を通じて石巻の復興に結びつけておられるのではないかと感じました。また、石巻魚市場では、放射線の測定器も導入し、きちんと検査をして安全であることを確認した魚を出荷できる施設を見学させていただき、安心、安全、愛情の女川の魚を届けていきたいと言われた言葉から、市場の復興がまちの復興につながるのだという地域に対する深く、そして強い想いを感じました。

石巻市では、多くの児童が犠牲になった大川小学校や、南三陸町で最後まで避難を呼びかけた防災センターを訪れましたが、胸が締め付けられる思いで、とても苦しく涙が自然



に流れ、言葉を失いました。自然の脅威は一瞬にして命を、家族を、生活を奪いました。一瞬にして日常生活を一変させてしまった地震と津波。私たちも、あの日を忘れず、手を合わせる。東北に気持ちを寄せることを決して忘れてはいけないと思います。

所々に空き地があり、復興にはまだまだ時間がかかるのだと思いますが、たくましくふるさとを復興させたいと願う地元の方たちの熱い思いを感じました。

自然は人々の心を癒すものでもあり、また、時に残酷にも、日常生活を一変させてしまふ脅威となることがありますが、私たちが毎日生活できることは、決して、当たり前ではないということ改めて実感しました。

至かされている」といふことに深く感謝し、謙虚に真摯に精一杯生きていかないとけないと心に誓った旅でした。

福島県

被災地の今

2017年8月24～26日東日本大震災被災地を巡る旅



汚染地域への出入りは、関係車両以外禁止



汚染地域は、住む人も無く、ゴーストタウンである。



除染作業車。奥に汚染土が並べられている

生活可能地域

放射能汚染地域

福島県南部のいわき市からバスで福島県を北上して縦断。国道6号線の右側は放射能汚染のため進入禁止区域。左側は生活可能区域で所々店が開業している



車窓のかなたに見えた東京電力福島第一原子力発電所

宮城県

石巻市



見学させていただいた(株)ヤマサコウショウ様

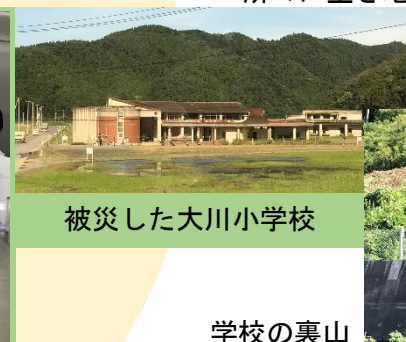


所々に空き地があるが復興している



復旧した石巻魚市場

東北大学と作った放射能検査機で安全を確認復興への強い気持ちを感じることができ、希望が持てました。



被災した大川小学校



学校の裏山

南三陸町



まだ復興途中だが、着実に復興してきている



最後まで避難を呼びかけた防災センター
県が管理して震災遺構として残される

震災後7年ぶりに開かれる航空祭に向けて練習中のブルーインパルス



被災の南三陸町役場
新庁舎に「高台で安心」
9月4日から利用開始